

ハンガン
漢江の風に触れる旅
——朝鮮半島統一構想へのアクセス——

広井大三

Seoul is soul 夏休みで帰国していた本学への留学生C君が、「ソウルの夜景と言えば、南山のソウルタワーが有名ですよ。」と、案内してくれた南山山頂のソウルタワー（ソウルタウォ・136メートルとその上に102メートルのテレビ塔）に登り、展望台から眼下のソウル市街を眺めると、散りばめた宝石の中を、水面を星くずのようにきらめきながら市内を東西に悠然と蛇行する漢江の風景が、視線からはみ出して広がり、そのソウルの夜の美しさに、私は思わず「Oh! Wonderful!」と叫んでしまった。

「市の人口1000万を越えて、今や世界的な大都市に発展したソウルは、韓国の誇りであり、韓国の発展のシンボルでもあって、その意味でソウルには韓国人たちの魂が込められているのだなあ。Seoul is soul. だから美しいのかねえ。」

ソウルの夜景に酔いしれた私のモノローグを耳にしたC君は、にっこり頷いて、「だから、今日の昼間、お話した韓半島の統一が、将来、実現した場合には、首都はソウル以外に考えられません。」と目を輝かせた。

私は、タワーからソウル全域を展望し、昼間とは違った情緒を漂わせた街明かりが漢江の川風に揺れる夜景を満喫しながらも、C君に触発されて、将来の南北の統一へ思いを馳せざるを得なかった。

研修旅行の目的 平成7年の8月のさ中、私がソウルを訪ねたのは、本学における創立70周年記念事業の一環として、法学部法律学科で企画した『21世紀における国家と人権、および民族自決権の法的概念の実証的研究』に参画するに当たって、私は、朝鮮半島の将来的統一構想をアプローチすることを視座の一端に据えて、かなり広範囲にわたるテーマを考えていたからである。

このテーマに関しては、既に本研究所所報・第15号と本学新聞“大東文化”平成7年7月15日号に、その概略を披瀝しておいたが、21世紀における民族集団の方向性を探求する素材として、連邦制国家の現実適応性を考察することを当面の研究課題としたため、北朝鮮が、かねてから提唱している南北統一のための連邦制構想が、私のアプローチの意識下にあって、その連邦制構想の、まさに、その現実適応性を判断するには、まず、南の韓国側の社会情勢を知る必要があるという“Need to know”の原則を実地に具体化した結果

が、今回の私の初体験・韓国訪問であったわけである。

そこで、私の研究対象が連邦制国家であり、それは韓国側ではなく、対立する北朝鮮側の構想と係わるため、私は、今回の韓国研修旅行では、極力、「連邦制」という言葉の使用を礼譲として控えることに努めた。

酷暑の板門店 ソウルタワーから、漢江^{ハンガン}の夜風に触れながらホテルに帰った翌日、私は、ソウル大学に留学中の日本人留学生H君と一緒に板門店を見学した。

板門店の見学は、私の研究テーマ上、欠かすことはできず、今回の韓国研修旅行の目玉でもあったわけであるが、H君は2年間もソウルで生活しながら、板門店へ行くのは初めてだと言って興奮していた。そこで、このような重要な場所を、何故、これまで等閑にしたのか、私が、その無関心を詰ると、板門店を見学するためには、苦学生にとって、かなりの出費が必要になるからだと弁解していた。

つまり、現時点で、われわれ一般外国人が板門店に行こうとする場合、個人で適当な交通手段を用いて行くということができない仕組みになっていて、原則的に（と言うことは、勿論、例外もある筈だが）大韓旅行社という業者が企画しているバス・ツアーに予約して参加する手立てしか無いとのことである。このバス・ツアーの料金が、日本語堪能なバスガイド付きの昼食込みで45,000^{ウォン}元（約5500円位）であった。

それでは韓国の人たちは、どうかと言うと、板門店入口の、いわゆる、“自由の橋”の手前までは自由に行けるが、橋を渡って板門店に入っていくことは禁じられているそうである。

このようなわけで、バスが“自由の橋”を渡るあたりから、朝鮮半島の現実の厳しさが、ひしひしと実感されてきた。道路のところどころに、敵戦車の進入を防止するためのコンクリートの遮断壁が目撃され、また、場所によっては道路周辺は地雷原になっているとのことで、途中、カメラによる写真撮影は、許可された場合を除いて厳禁された。

そして、いよいよ、南北の唯一の接点である板門店に到着して、軍事停戦委員会の会議場に入り、南北交渉用の机に手で触れたり、南北の事実上の国境である軍事分界線を目の当たりにしたり、北側が南侵用に掘ったとされるトンネル跡をのぞいたりしていると、否応なしに高まる緊張感が、真夏の酷暑と重なって私の汗腺をいたいほど刺激するのだった。

休戦協定と戦争状態 ソウル北西約60キロの板門店（パンムンジョム）で、1953年7月、朝鮮戦争の一時的な休戦を実現させるための朝鮮休戦協定が締結されて、当時の戦線を南北の境界線とし、その境界線（いわゆる、38度線）の南北に各々2キロの幅員で非武装地帯が設定された。

こうして朝鮮戦争の戦闘行為は中止されたが、もとより南北間の戦争状態が完全に消滅

したわけではなかった。一時的に、或るいは、戦場の一部について、敵対行為を中止させる目的で軍事行動を停止させることが休戦で、それは、通常、条約の形式で具体化されるので、休戦条約、または、休戦協定の締結によって休戦は発効するが、休戦は、全面的な終戦ではないので、あくまでも正式、かつ、完全に戦争状態を終結させるためには講和条約（平和条約）の締結が必要となる。すなわち、休戦協定が締結されていても、講和条約が成立していなければ、たとえ、戦闘行為は停止していても戦争状態は相変わらず継続しているわけである。

したがって、朝鮮半島の南北間には、休戦協定により確かに戦闘行為は停止されているが、現在でも依然として戦争状態が続いているのであって、こうした悲劇への実態を、ともすれば日本人は忘却の彼方に押しやりがちであるが、大いに自戒しなければならない。

過酷な分断の現実 このようなわけで、南北間の休戦協定は、既に40年以上にわたって存命するというギネス・ブック的記録を更新しているのであるが、両者が、今もって戦争状態にあるという過酷な現実、板門店でもリアルに窺い知ることができる。

それは例えば非武装地帯の南北両サイドに張られた鉄条網で、きわめて具体的に示されている。聴くところによれば、この鉄条網は、38度線に沿い朝鮮半島を横断して張りめぐらされており、その長さは241キロ、しかも、その外側には地雷原が延々と続いているとのことである。

だから、休戦協定の締結以来、板門店は、南北唯一の接点として交渉の場になっているが、その交渉方式は、絶えず対立と不和の構図の中で展開されて、いたずらに軋轢と決裂を繰り返してきた。時には募る不信感からの殺戮も行われた。中でも、“ポプラ事件”は、そうした不信の最たるものであろう。板門店の“帰らざる橋”の南側手前には、かつてポプラの木があって、その地帯は、双方の共同警備区域とされていたが、1976年8月18日、そのポプラの木が見晴らしを妨げるために切ろうとしたアメリカ兵2名が、北鮮兵士たちによって斧で殴殺されるという事件が発生し、これを契機に板門店は共同警備から分割警備に変更されたのである。

こうした分断の悲劇を象徴する場所に立って、昨夜のソウル市街の景観を想うと、そのギャップの大きさに戸惑いを感じざるを得なかったが、それだけにまた、このような別世界の日も早い消滅を祈りたい気持ちにもなった。

同行のH君は、心なしか寡黙になっていたが、やはり、私同様に、平和の尊さと、朝鮮半島における真の平和の到来を心底から願う気持ちにひたっていたのだと思う。

板門店から帰途に就いて“自由の橋”を渡るあたりから、私たちの緊張感も次第にほぐれ始めたが、バスの車窓には、一切の妥協を排除するような鉄条網の容赦ない光景

が、果てしなく延々と続いていた。

私は、板門店とは別に、最近、ソウル近郊の新名所になっているオドゥ山^{トンイルジョンマング}“統一展望台”（韓国の人たちが北側を自由に展望できる場所）にも行ってみたいと思いながら、時間的余裕が無いために割愛してしまったが、今にして思えば、実に残念でならない。

連合と連邦 朝鮮半島の分断状態を解消するためには、南北の国家統一を実現させなければならず、それは、まさに民族の悲願であるために、これまで、その統一構想をめぐっては、両者間でさまざまな対応が展開されてきた。

そこで、その経緯を辿ってみて言えることは、南側の韓国が公式に提唱してきている民族和合・民主統一方式（例えば1982年1月）は、要約的には、いわゆる、国家連合方式として把握できるということである。

すなわち、その構想の内容を見ると、南北関係正常化のための南北不可侵条約の締結と南北朝鮮基本関係暫定協定の締結を基調としてソウルと平壤とに閣僚級の連絡代表機関を常駐的に設置することが盛り込まれているが、ここでは南北二国家の存続が想定されているように思える。とすれば、これは国家連合構想である。

国家連合というのは、二つ以上の国家が、政治的・経済的な共通利益のために、主権を共同に行使する目的で結合する場合を言うが、国家連合そのものが、国際法上の主体になるのではなく、連合を構成する各国家が依然として国際法上の主体性を保持するのである。ただ、国家連合の場合、主権を共同に行使するための中枢機関をもつが、韓国案でも中枢的な統一国会の設置が提起されている。勿論、韓国側は“連合”という言葉が公式には用いていないようであるが、国家統合を形成するまでの暫定措置として考えれば、国家連合方式は、かなりの実現可能性をもつのである。何故ならば、国家連合は、通常、連邦を形成する前段階の経過措置として存在するからである。

この点で、連合と連邦とでは、国家の発展段階が異なると言える。つまり、連邦においては、その構成国は、内部的にかなりの国家的性格を維持しながらも、対外的には国際法上の主体性を保有しない存在となるのである。したがって、構成国の数は複数でも国家としては一つになるわけであって、この点でも連邦と連合は違うのである。連合の場合、連合構成国は、対外的に依然として国家のままだからである。

北の連邦制構想 前に述べたように、北側は連邦制構想を提案している。公式の構想として、“連邦制”が最初に登場したのは、私の知る限りでは1971年であるが、それが、1973年には、高麗連邦共和国として具体的名称を与えられ、更に1980年には高麗民主連邦共和国に修正補完されている。

こう見てくると、韓国側は、南北連合方式による統一を、北朝鮮は、南北連邦方式によ

る統一を、各々、描いていることになるが、連合と連邦が国家形態として異なるように、南北統合への両者の青写真は、プロセスにおいて微妙に違っているわけである。一方の韓国側の連合方式は、究極的な統一国家が形成されるまでの暫定的な経過措置としての意味合いをもち、南北両国家が二つの国家として暫定的に結合するパターンだと理解されるのである。

他方、北朝鮮側の連邦方式では、一つの国家の中に二つの政治体制が共存する形態を採用することになり、高麗民主連邦共和国の中に二つの州政府的な地方自治政体が存在することを意味するわけである。

いずれにせよ、連合方式でも、連邦方式でも、両者の国力（主に経済力、政治力、軍事力）が同程度であることが合体の必要条件であって、この点で対等な関係が生じない限り、両者の統合は非常に困難であると言える。

旅のエピローグ 私の研究テーマは、21世紀における連邦制国家の存在理由^{レゾンデートル}に係わるので、その意味では北側の提案する連邦方式のほうが、研究上のモチーフになり得るのであるが、将来的な展望に立って、その実現の可能性を考察すると、先に触れたように、一般論的には連合は連邦制を採用する前段階で適合する方式であるので、少なくとも統一方式の総論としては、韓国側の連合方式のほうが実現の可能性が高いように思われる。

しかし、実際には、どうなるのか。朝鮮半島の統一構想としての選択肢は、この二つしかないかどうか。勿論、武力による征服的な統一があってはならないが、東ドイツが西ドイツに吸収されたようなことが起こり得るかどうか、神のみぞ知るのであろう。

それにしても、双方が、“吸収”や“解放”の旗を掲げて、対決姿勢を強めるようであれば、それだけ南北の統一は遠のくのであるから、たとえ、統一形式に相違や対立点があっても、小異を捨て大同に立って忍耐強く、朝鮮半島の緊張緩和と統一の方向へと和解と妥協のステップを踏み出してほしいものである。

私は、このような感慨を抱きながら、ソウル発・釜山行のセマウル号の旅情に独り心をなごませていた。(終)